

「上のものに属しなさい」 井上隆晶牧師

イザヤ書 65 章 1～5 節、ヨハネによる福音書 8 章 21～25 節

## ①【イエス様はやがて去ってゆかれる】

イエス様はユダヤ人たちに「わたしは去ってゆく。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪の内に死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」（ヨハネ 8：21）と言われました。イエス様はやがて十字架で死に、復活して天におられる父なる神の右の座に帰られます。ユダヤ人は地上でせっかく天に、神に目の前で会っているのにそれを無駄にしまいました。イエス様が去れば、誰も救われません。光が去れば闇が支配し、命が去れば死が支配し、知恵が去れば無知が支配し、神が去れば悪魔が支配します。イエス様が近くにいる間に、救いを確かにしなければなりません。恵みはいつまでもあるわけではないのです。私は大阪に来て 47 年になりますが、まだ通天閣に登ったことがありません。いつでも行けると思っているからです。そうこうしている内に人生は終わるかもしれません。そして思ったのです。人間は本物が目の前にいても、求めることはしないのです。結構、偽物で間に合っているからです。本物であるかどうかあまり関係ないのです。それを見分ける力もないからです。ああ、何と人間は見えなくなったのでしょうか。これが罪の症状なのです。

## ②【この世に属すると死ぬ】

「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。」（8：23～24）「下のもの」とは「この世」のことです。イエス様は「上のもの」、すなわち「神の国」に属していますが、ユダヤ人たちは「下のもの」、すなわち「この世」に属しています。だから彼らは自分の罪のうちに死ぬとイエス様は言われました。要するに上のものに属さない限り、あなたは死ぬと言われたのです。

この世とは何でしょう。この世は、神のいない世界です。最近、つくづくそう感じるようになりました。人間はこの世から神を追い出したのです。人間だけの世界、すべてを神抜きで考えようとする世界です。人間がこの世界を支配し、自分の思い通りに資源を使い、神に聞くことなく、自分で判断を下し、神の裁きを待たないで自分で裁きます。神を恐れることもありません。神のみが命なのですから、神から離れた世界は死んだ世界なのです。生きているように見えますが、実は死んでいます。地上には人の罪が溢れています。罪のあるところに死は存在しますから、この世は死が溢れている世界なのです。命は天から降ります。神だけが命を持っているからです。この命こそキリストです。この命に結ばれて生きる人は死から命に引き上げられるのです。この世に属し、下のものに属していると

死にます。上のもの、すなわちキリストに属さなければ死にます。

●芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という短編小説を読んだことがあるでしょう。犍陀多（カンダタ）という大泥棒が地獄の底で呻いていたら、天から一本の蜘蛛の糸が降りて来ました。生前に、蜘蛛を憐れんで生かしたので、お釈迦様が犍陀多を救おうとして糸を垂らしたのです。命の綱は天から降ってくるのです。その糸にしがみつき、犍陀多は天に登ろうとするのですが、下から登ってくる罪人たちを見て、「この糸は俺のものだ」とその人たちを落とそうとすると、糸が切れてしまい、再び地獄の底に落ちていくのです。それを思い出しました。

キリストが天から来た、天に属する方だと信じるなら、その方にしがみつくとはいけません。その方以外に私たちが天に連れて行ける方はいないからです。しかしユダヤ人たちはその救いの糸を自ら切ったのです。何と愚かなことでしょう。あなたはキリストにしがみついていますか？それともキリストなしで天に登れると思っていますか？それならあなたもユダヤ人と同じように、この世の中に落ちてゆき死ぬでしょう。

### ③【わたしはあるということを信じなければ死ぬ】

「わたしはあるということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」（8：24）と主はユダヤ人に言われました。自分の罪のうちに死ぬと言われたのはこれで三度目です。「わたしはある」というのは、モーセに現れた神の名前です。モーセが神の名を尋ねたとき、主は「わたしはある。わたしはあるという者だ。」（出エジプト 3：14）と答えられました。この神だけが使う名前をイエス様はご自分に対して使われたのです。「はっきりしておく。アブラハムが生まれる前から『わたしはある。』（ヨハネ 8：58）「人の子を上げたときに、初めて、『わたしはある』ということが分かる」（ヨハネ 8：28）十字架につけたときに初めて、イエス様が神であったことが分かるという意味です。教会はイエス様の頭の後ろに十字架を書き、その中にこの「わたしはある」という言葉の頭文字「α、ω、ν」を入れることによって、キリストは神であることを表したのです。隠れていた神は、今イエス・キリストという姿で現れたのです。ここでイエス様はユダヤ人に「私が神であるということを信じなければ、あなたがたは死ぬ」と言われたのです。

●ある牧師が、「私はイエス様を特別な力を持つ方としてあまり表現したくはありません。もっと人間として語りたい」と言われたのを聞いて、私は驚き呆れました。聖書が書かれた目的ははっきりしています。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためである」（ヨハネ 20：31）と書かれています。あなたがたが単なる人間だと思っていた方が、実は神だったのだよという事を教えるために書かれています。パウロははっきりと、キリストが万物を創造したと語り、ヨハネもキリストは神だとしています。教会は 381 年にニケア信条を定め「万世の前に父より生まれ、光よりの光、真の神より

「の真の神、生まれし者にして造られしにあらず、父と一体にして、万物彼によって造られ」と告白し、451 年に制定されたカルケドン信条では「神性において完全であり、同時に人間性においても完全であることを」告白しました。キリストを神として聖書を読み返すとき、初めてその深い意味が分かってくるのです。

こんな初歩的な教えをまだ受け入れないで「キリストとは神か？人か？」と議論している教師がいるのです。愚かなことです。彼らは 3 世紀以前で止まったままなのです。異端の解釈と同じことをしています。「聖書のみ」にしたら、人の頭の数程あるキリスト論が生まれます。その混とんとした状態の中で礼拝しているので、教会も混とんとして一本筋が通らないのです。私たちは初歩の教えを受け入れ、迷うことなく父と子と聖霊の一体なる神を拝み、祈りをささげ、キリストに似た者になるという目標をめざして前に向かって前進するのです。的は狂いませぬ。はっきりしているのです。キリストが神であるという事を信じなければ、信じたこと自体が無駄になり、あなたは死にます。

私は今日「上のものに属しなさい」という話しをしています。上のものに属するとは「神の国に属する」ということです。私たちは洗礼によってキリストと共に葬られ、この世に死んだのです。死んだだけでなく、復活して神の国に属する者とされたのです。肉体はまだこの世にありますが、すでに神の国に生きているのであって国籍は天にあるのです。それはまた「主人が変わった事」でもあるのです。キリストを主人としたのですから、地上の主人に仕えてはなりません。ニケア信条で「また信ず。唯一の主、イエス・キリスト」と告白するように、主人はただ一人キリストだけです。だから初代のクリスチャンたちは地上の主人（皇帝）を拒否し、喜んで殉教したのです。

●2 世紀のスムルナの監督であったポリュカルポスは使徒ヨハネの弟子でした。迫害によって捕らえられ、刑場に引かれてゆきました。執行官が彼に最後のチャンスを与えようとして言いました。「キリストを呪え、そうすれば助けよう。」ポリュカルポスは答えました。「私は 86 年間、キリスト様に従い続けてきましたが、その間ただの一度も私に不幸をお与えにならず、恵みのみを与えて下さいました。こんなにまで私を愛して下さいる主を、どうして呪うことができましょう。」こう言って彼は殉教していきました。

主人であるキリストが守れと言われた言葉なのですから、それが天国の法なのであり、それを私たちは守るのです。それなのにどうしてこの世に属するかのよう

に生きるのですか？初代教会の信徒たちは、信仰とはこの世に死に、神の国に生まれることだとはっきりわかっていました。この世は過ぎ去ります。永遠に残るものにこそもっと時間を使うべきなのです。キリストに属する者、天の国に属する者として賢くこの世を生きましょう。